

DOM JUAN ET LES RÈGLES

徳 村 佑 市

1. 緒 論

Molière の Dom Juan は1665年2月15日に Palais-Royal 座で初演されたが、この作は従来から、フランス古典劇を特徴づけている三一致の規則を破つていくとゆうことが良く言われてきた。時の法則も、場所の法則も、アクションの法則もことごとくやぶつていくとゆうことが言われてきた。なるほど一見するところではこれらの法則は皆、彼の他の作品には見られないほどに破られているし、彼もまた *la Critique de l'Ecole des Femmes* で、規則を金科玉条としてこれを厳守する人々を攻撃し、より自由な態度を主張しているのであるが、その主張が三一致の規則を完全に無視した革命的なものであつたか、あるいはそうでなかつ

たかとう点を明確にすることを怠るならば、この Dom Juan について Molière が規則を大幅に破つていくと言つても、それは彼の考え方や性格をまで説明する批評とはならないであろう。それ故この小論では、彼の作品に先んじて、同じく Dom Juan の材料をとりあつかつている作家のうち、Molière が影響を受けたと思われる作家、チコニーニ、デリベルト、ドリモン、ド・ヴィリエの作品、同じくグーレットの筋書を参考にしながら、Molière は Dom Juan に於て規則を破つていくが、それはどの程度まで破つていくのか、その破り方は規則に対する革命的なものであるか否かを明かにしたいと思う。

2. L'unité de temps

L'unité de temps の場合を見て行く前に、これから参考にして Molière の Dom Juan と比較して行く作品について簡単に説明して置こうと思う。Molière に先んじて同じ題材をとりあつかい、かつ Molière に影響を与えた作品にはイタリアでは本格喜劇が二つ、即興劇が一つ、フランスでは本格喜劇が二つある。イタリアの本格喜劇はザアチント・アンドレア・チコニーニの「石の招客」と、オノフリオ・デリベルトの同名の作品である。前者は初演ならびに出版年代は不明であるが、作者が1650年に死んでいるから年代的に最も古いとされており、また後者は、1652年にナポリのフランチェスコ・サヴィオ書店から刊行されたけれども今に伝つておらない。しかしこの作品は Molière に先行するフランスの二作品のなかに跡をとどめると言われるから、それによつてうかがいがい知ることが出来る。即興劇の方のグーレットの筋書は、その前書に同作品が1658年、フランスのプティ・ブルボン座で演ぜられたとするしているが、残つている作品には Molière の影響と見られるものもあらわれているか

ら、現存の筋書は1658年当時のものではなく、それに変更を加えられたものと見られているが、しかし大体1658年当時のものを想像することが出来る。フランスの二作品はドリモンの「石像の饗宴」及びド・ヴィリエの同名の作品であり、前者は1658年末に書かれリヨンで初演されたもので、翌年リヨンで刊行され、1661年パリで再演されている。又、後者は1659年オテル・ド・ブルゴーニュ座で初演され、翌年パリとアムステルダムで上演されているが、この両者は前にも述べたとおり、イタリアのデリベルトの作品をつたえるものとされているので、以下この線で、これらの作品と Molière のそれとを比較しつつ論をすすめて行きたいと思う。

まづチコニーニの「石の招客」についてであるが¹⁾、この作品は三幕からなつており、各々の幕の間にそれぞれ相当の時間が経過しているように思われる。すなわち第一幕では場所はナポリであつて、悪事のために郷国にいたたまれなくなつたドン・ジョヴァンニ(ドン・ジュアン)は、ここでも性分があらたまらず、

1) チコニーニ、デリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作品、グーレットの筋書については小場瀬卓三著「フランス古典喜劇成立史」所載の梗概による。

公爵の娘イサベッラに想いをかけ、彼女の許婚の夫であるオッタヴィオ公の外套に身をつつんで闇にまぎれて宮廷にしのびこみ、彼女を自分のものにしてしまうが、間違いに気づいた彼女にさわぎたてられ、たまたま来あわせた彼の叔父、スペイン大使としてここに駐割するドン・ピエトロのはからいで逃げる事が出来たが、ここにもいられなくなつてスペインへ舞いもどろうとすることなどがえがかれているが、第二幕では場所はすでにスペインのカスチリアに移つており、ドン・チョヴァンニもオッタヴィオ公もともにここに現れている。カスチリア王はドン・チョヴァンニがナポリで犯した罪を償うために自分の廷臣オリオラの娘、ドナ・アンナをオッタヴィオ公にめあわせようとするが、オッタヴィオ公からその事を聞いたドン・チョヴァンニは又もや彼をペテンにかけ、その外套をかりてドナ・アンナをおかしてしもう。しかし欺かれたと知った彼女が声をたてるので、父の騎士がかけつけるが、ドン・チョヴァンニはこれを殺して逃げることになつてゐる。これを見ると第一幕と第二幕の間かなりの時間が流れていることがわかるのであるが、さらに第三幕に入ると、ドン・チョヴァンニと召使のパスサリーノがある寺院の中で、前にドン・チョヴァンニに殺された騎士の立派な石像を見つけるところがあるから、第二幕と第三幕の間にもかなりの時間の経過があることがわかるであろう。

次はヂリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの「石の招客」であるが、この作は五幕からなつており、第二幕第二場ではドン・ジュアンはドン・フィリップの恋人アマリーユのところへ身代りとなつて忍びこみ彼女を拐わそうとするが、叫びをききつけて下僕とともに父親のドン・ピエールがかけつけるので、ドン・ジュアンはこれを殺して逃げることになつてゐる。そして第四幕第九場では殺されたドン・ピエールの墓所に立

つ石像をドン・ジュアンが見つけたところがあるから、その間にかかなりの時間が経過していることがわかるであろう。

又、グーレットの筋書は三幕からなる即興劇であるが、単なる覚書にすぎないものをそのまま仏訳したために生じた難点として、事件の先後を誤つた所もあると言われる。しかし第二幕で、オッタヴィオの許婚の女、ドナ・アンナのところでドン・ジュアンはとりかえたオッタヴィオの外套をきて忍びこむのであるが、悲鳴をききつけて彼女の兄があらわれるので、ドン・ジュアンはこれを殺して逃げてしもうが、第三幕ではドン・ジュアンが殺された騎士の墓碑銘をあざけるところがあるから、ここでも又、第二幕と第三幕の間かなりの時間が流れていることが了解されるであろう。

ところが Molière の *Dom Juan* では騎士を殺す場面は劇のはじまる六カ月前のこととされてお²⁾り、劇は第一幕から第四幕まで第一日に、第五幕はその翌日におこることとされてお³⁾り、時間的に見れば二十四時間を少し越える範囲内で事件がはじまり終ることとなつてゐる。それで先に見たように、グーレットの筋書は事件の先後を誤つた個所があると言われるから、これはしばらくおいて、チコニーニの作品、ヂリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作品、Molière の作品を比較して見ると、チコニーニの作品が時間的に一番長期にわたつて展開されてお²⁾り、ヂリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作品ではチコニーニの作の第一幕にあたる部分が省略され、それだけ時間的に短縮されてお²⁾り、さらに Molière の作品ではヂリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作品にくらべてより一層時間が短縮されているのだから、時期的に見てあとになればなるほど、二十四時間のわくに近づいてお²⁾りと言えるのではないだろうか。

2) Acte I, sc. 2

3) 第一幕第二場で Dom Juan は *Cet époux prétendu doit aujourd'hui régaler sa maîtresse d'une promenade sur mer.* と言つてお²⁾り、第二幕で難船のことが語られるから、第一幕と第二幕は同日。第三幕第三場で Dom Carlos が *Nous l'avons suivi ce matin sur le rapport d'un valet qui nous a dit qu'il sortait à cheval, accompagné de quatre ou cinq, …* と言つてお²⁾り、第二幕での *La Ramée* の警告を考えあわせて第二幕と第三幕は同日と考えられる。又、第三幕第五場で、Dom Juan が *Demande-lui s'il veut venir souper avec moi.* と言ひ石像を招かせるところがあり、第四幕で石像があらわれるから第三幕と第四幕は同日。そして第一幕から第四幕までが同日であることは、第四幕第六場の *Done Elvire* の言葉…*et vous me voyez bien changée de ce que j'étais ce matin* によつてもわかる。又、第四幕第八場で石像が *Je vous invite à venir demain souper avec moi.* と言つてお²⁾り、第五幕ではその石像が *Arrêtez, Dom Juan : vous m'avez hier donné parole de venir manger avec moi* と言つてお²⁾り、第五幕がその翌日であることがわかる。

3. L'unité de lieu

チコニーニの作品では場所は第一幕ではナポリ、第二幕と第三幕ではカスチリアで、舞台は広くイタリアからスペインへと移っており、かつ一幕の中でも場所はいくつもかわっている。

デリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作では場所は第一幕と第二幕ではセヴィリア、第三幕では森の中、第四幕では田舎道、第五幕ではドン・ジュアンの宿舎となっており、かつここでは一幕のうちで場所はかわっていない。

グーレットの筋書ではチコニーニの作に見られるように、一幕の中で場所がいくつもかわっているから、これは比較からはふいてゆこう。

Molière の *Dom Juan* では舞台はシシリイ島になつており、Classiques Larousse の註によれば場所は、第一幕では「すべての散歩者に解放されている公共建造物である宮殿」(Le théâtre représente un palais, apparemment un monument public ouvert à tous les promeneurs) 第二幕では「海に近い、町から遠くない田舎」(La scène se passe à la campagne, au bord de la mer, et non loin de la ville) 第三幕では「海の近くの、町に近い森」(Le théâtre représente une forêt, proche de la mer, et dans le voisinage de la ville) 第四幕では「Dom Juan の居室」(Le théâtre représente l'appartement de Dom Juan) 第五幕では「町のごく近くの田舎」(Nous sommes dans la campagne, mais aux portes de la ville) となっており、場所の範囲は大体、宮殿のある町とその周辺

とゆうように考えられる。そしてこの作ではデリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作の場合と同様に一幕の中では場所の変化は行われない。

J. Scherer によると l'unité de lieu の成立には三つの段階が見られると言われる。すなわち第一段階とゆうのは、l'unité de lieu についての考慮が見られないで、事件がフランスからイタリア、ドイツからイギリスとゆうようにいくつもの国にわたつて行われるような段階であり、第二の段階とゆうのは⁵⁾ l'unité de lieu についての考慮は見られるが、それがまだ広範囲にわたつている時期であつて、たとえばある都市の内部やその周辺の各地、あるいは、平原や森や島のような小範囲の地域内の各地の間に l'unité de lieu が成立すると考えられる段階であり、第三の段階とは⁶⁾ 古典期の l'unité de lieu の見られる段階であると言われる。

これによると Molière の *Dom Juan* は第二の段階に属するとゆうことが出来よう。

またチコニーニの場合は第一の段階に属し、デリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエのそれはほぼ第二の段階に属するとゆうことがいいうるのであるから、l'unité de lieu に関しては Molière の作品は時期的にそのすぐ前にあるデリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作品とほぼ同じ様相を呈し、さらにそれに先んずるチコニーニの作品に比べて一步古典期の一致に近づいていると言えるであろう。

4. L'unité d'action

J. Scherer によれば l'unité d'action の定義は次のとおりである⁷⁾。すなわち、

(1) L'intrigue principale を部分的に説明不可能にすることなしには人は l'intrigue accessoire のいかなるものもとりさることは出来ない。

(2) すべての l'intrigue accessoire は作品の頭初より発生し、大円団までつづく。

(3) L'intrigue accessoire と同様に l'intrigue principale の発展は、中途からの純粋な偶然による事

件の導入なしにもつばら序幕の与件による。

(4) 各々の l'intrigue accessoire は l'intrigue principale の展開に影響を及ぼす。

そしてこの四つの条件が確証されるとき、作品の「行為」は統一されていると彼は言う。この定義にひきくらべて見て言えることは、Molière の *Dom Juan* には l'intrigue principale と言うべきものがないとゆうことである。そしてこのことはチコニーニ、デリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作品についても

4) La Dramaturgie classique en France p. 184

5) Ibid., pp. 185—186

6) Ibid., p. 190

7) Ibid., pp. 103—104

同様であるから、Molière の作品には他の作家達の作品と同様、l'unité d'action はないということが出来るであろう。

以上のように Molière の Dom Juan には l'unité d'action がないのであるが、それにも拘らず、彼の作品が統一した印象を与えるのは何故だろうか。それに答えるかのように J. Scherer は l'unité d'intérêt とゆうのをあげている。そして La Motte (1672—1731) の言葉をひいて次のように説明している⁸⁾。すなわち、La Motte は「Le Cid に於ては l'unité de temps も l'unité de lieu も l'unité d'action もない。しかし興味がいづも Rodrigue と Chimène の上に落ちるから、そこには常に l'unité d'intérêt があるが故に l'unité d'intérêt とゆうのは他の三つの「一致」から独立したものである。そしてそれは又、l'unité d'intérêt が l'unité d'action から区別されるとゆうことを証明する所以でもある。」と言っているが、これはしかし重要な訂正を要する。すなわち、l'unité d'intérêt はしばしば l'unité d'action によつて掩われないう点で l'unité d'action から区別されるのではない。別の言い方をすれば、l'unité d'action は常に l'unité d'intérêt を含んでいる。少くとも作品が興味あるものである時はそうだが、その逆は真ではないと言ひ、l'unité d'intérêt は le Cid におけるように一人の人物、あるいは一対の人物に寄せられる興味によつて、行為を一致させるための原理の厳格な遵守をおきかえるのにあてられた l'unité d'action の代用物のように見えるとのべている。

5. 結 論

L'unité d'action から l'unité d'intérêt にふれ、Molière の Dom Juan が l'unité d'action にもとづくものではなく l'unité d'intérêt に基礎をおくものであることを見てきたのであるが、普通三一致の規則とゆうのは l'unité de temps, l'unité de lieu, l'unité d'action をさすのであつて、この三一致の規則の側から l'unité d'intérêt に基礎を書く Molière の Dom Juan を批判するのはいささか不当なのであるが、我々は緒論において三一致の規則から見た場合、Molière の作品はどう考えられるかという問題を提起しておいたのであるから、ここでは三一致の規則から見た場合

又、Molière の作品に関しては⁹⁾、彼の作品はしばしばこの l'unité d'intérêt によつてつくられているのであつて、彼の作品の多くの場面は筋そのものには無用であるが、性格を浮彫りにするのに役立つのであるから、それらは l'unité d'action に対して有用なのではなくて l'unité d'intérêt に有用なのだと言ひ、Molière は l'unité d'action に対して l'unité d'intérêt を代置したのであつて、人が l'Avare は「性格喜劇」だと言ふとき意味するものは又そのことだと言つている。

l'unité d'intérêt とゆうもの、及び「性格喜劇」との関係は大体以上のものであるが、我々がここで問題にしている Molière の Dom Juan の場合はどうであろうか。Dom Juan の第一幕第一場で、Sganarelle は Gusman に向つて、自分の主人 Dom Juan の女性征服者としての一面をのべたのち、次のように言つている。すなわち、

Ce n'est là qu'une ébauche du personnage, et pour en achever le portrait, il faudrait bien d'autres coups de pinceau.

(これだけちやほんの上つ面を伝えただけさ、ありのままの肖像を画くとなつたら、もつと筆数が要るよ。)

そしてその後のいくつかの幕では Dom Juan の他の面もえがかれてゆくのであるから、我々はこの作品も主人公 Dom Juan に対する l'unité d'intérêt の上になりたつている「性格喜劇」だと言ふことが出来るよう。

Molière の作品はどう見られるかについて一応の結論を下して置こう。

これまで見てきたように、l'unité d'action については Molière の作品においても他の作品においても規則は守られていないし、l'unité de lieu についてはチョコニーニの作品がその第一期の様相を呈しているのに対し、Molière の作やデリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作は第二期の様相を呈しているのであるから、Molière の作はデリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエの作と同様にチョコニーニの作よりも一歩古典期の一致に近づいているわけであり、l'unité de temps に

8) Ibid., p. 107

9) Ibid., pp. 108—109

ついては、チコニーニのものよりもデリベルト＝ドリモン＝ド・ヴィリエのものが時間的に短縮されており、Molière のものはそれよりもさらに短縮されて、24時間をわづかに越す程度となつているのであるから、他の作品にくらべて Molière のものもつとも規則に近いとゆうことが出来よう。

そして以上のことから Molière が一番規則に近いとゆうことが言えるのであるが、しかし他の作家達も規則に無関心であつたわけではないので、Antoine Adam はドリモンやド・ヴィリエがその題材をとりあげたのは、観客の満足を得ようとする俳優達の要請によるのであつて彼等自身はすすんでしたわけではなく、むしろ嫌悪の念をもつてしたのであるとし、「その Dom Juan の素材は秩序や創意に乏しくそして主題は不規則な状態にある」とゆうド・ヴィリエの言葉をひいているから¹⁰⁾、彼等にも規則のことが念頭になつたわけではないのである。

また Daniel Mornet は Carrington Lancaster の言によつて次のようにのべている¹¹⁾。すなわち、「1653年と1672年の間では l'unité d'action は約半数の喜劇においてやぶられている。そして面白いと思われる挿話や滑稽な場面は正確な論理よりも重いとされている。L'unité de temps はモンフルリィの l'Ecole des Filles を除けば少くとも1660年以降は尊重されているが、喜劇の大多数に於てはその一致を数軒の家やそれ

をへだてている空間にまでひろげる場合にのみ l'unité de lieu が見られるのである。」とのべているのであるが1665年の作である Molière の Dom Juan は大体ここに言う1660年——1672年の作品群の範疇に入るのであるから、彼の作が他の作家の作よりも一歩規則にちかいかいと言つても、そこには時勢の影響もあることを否むわけにはゆかないであろう。

しかしそのように一面には時勢の影響はあるにしても、その反面では Molière が規則に近づこうとしており、かつ他の作家よりも一歩それに近づいているとゆうことを我々は認めねばならないだろう。

普通 Molière の Dom Juan は三一致の規則を大幅に破つた作品であると言われている。なるほど、それのみを単独でとりあげて見ればそのような結論も出てくるのであるが、しかし我々が見たようにこれを同じ題材をとりあつた他の作品と比較して見ると、一見それとは逆のようにさえ見える——Molière は規則に近づこうとしている——とゆう結論も出てくるのである。それで Molière は La Critique de l'Ecole des Femmes では規則に対する自由な見解を表明しているけれども、その自由さは当時の喜劇に許された自由さであつて、彼自身は古典期の間人として出来るかぎり規則に近づこうとしていたのであつて、別に規則に対する革命的見解をもつていたわけではないとゆうことが言えるのではないだろうか。

参 考 書

- | | | |
|------------|----------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| J. Scherer | : La Dramaturgie Classique en France | çaise Classique 1660—1700 |
| G. Lanson | : Histoire de la Littérature française | A. Adam : Histoire de la Littérature française au XVII ^e siècle. Tom III |
| D. Mornet | : Histoire de la Littérature fran- | D. Mornet : Molière |
| | | 小場瀬卓三 : フランス古典喜劇成立史 |

10) Histoire de la Littérature française au XVII^e siècle. Tom III p. 321

11) Histoire de la Littérature française Classique 1660—1700, p. 257